



〒242-0007 大和市中央林間3-16-12 グリーンコーポ中央林間107

電話/Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

## 教育講演会連続講座2回を終えて

今年のEd.ベンチャー教育講演会は、新型コロナウイルス感染防止のため、ウェブによる連続講座「コロナ禍で考える教育のあり方」として開催しています。このEd.ベンだよりでは、その様子をお伝えいたします。連続講座の内容の紹介だけでなく、整理された課題等もお伝えしたいと思います。

### 第1回 10月24日「教育の不平等と学校の役割」 日本女子大学 清水睦美教授

連続講座のスタートに当たり、現在の教育現場が抱える根っこの課題としての「不平等、格差」を取り上げ、これ以後の連続講座の底流となるべき視点を整理しました。清水先生の話題提供を受け、現場の先生方の座談会として話を深めました。清水先生から提供された話題は3つでした。

#### ●話題1● 家庭間格差を前提とした学校教育が始まっているのではないか

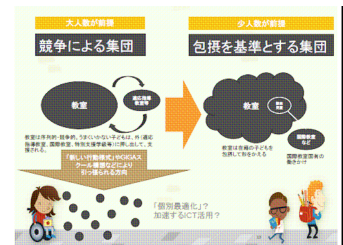
2018年のベネッセと朝日新聞の共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査」では、「所得の多い家庭のほうが、よりよい教育を受けられる傾向があると言われます。こうした傾向について、あなたはどのように思いますか。」という質問に対して、2004年と2018年の結果を比べてみると、「当然だ」、「やむをえない」と答える割合は明らかに上昇しており、しかも全体の60%を超えた。また、この結果を家庭の経済状況別で見ると、家庭経済にゆとりがある家庭ほど、「格差を是認する」率が高くなっていった。このことから、コロナ以前の学校現場や教育行政現場では、「家庭間格差は避けられず、格差があるのは普通である」という捉え方と、「教育は親の生活レベルとは切り離して保障するべきだから、下位に位置する子どもたちには、部分的でも手厚くすることで、学校が再分配機能を持つべきだ」とする考えとがせめぎ合っていたのではないかと推察される。この問題がコロナ禍でどうなっているかが重要。

#### ●話題2● 一斉休校後の学校再開のあり方を振り返って考えてみる

子どもたちにとって学校は社会活動の場であったが、一斉休校でそれが奪われてしまっただけでなく、それが「突然」であったことに問題がある。それは、部分的ではあっても、学校が担っていた再分配機能が突如停止したということにほかならないからだ。結果的には弱い子どもほど、影響を強く受けざるを得なかった。そのことを考えると、学校再開時にそれぞれの学校現場で、子どもたちの自律性を回復するためにどのような取り組みを行なったかが重要である。休校期間中どうであったのか？何を経験したのか？何をがんばったのか？そうした様々な問いかけがゆっくりなされる中で、子どもたちは、それぞれの体験を語りで共有し、いまここに自分たちがいることを実感できたはず。多様な経験の共有が学びの土台となり、再分配機能も復元する。

#### ●話題3● 教育の不平等と今後の学校教育の役割を考える

今回の連続講座の3回目講師にもなっている本田由紀教授は、教育内容をめぐるレリバンス（関連性・意義）について、市民的レリバンス、職業的レリバンス、即時的レリバンス（学んでいる時に面白い、楽しいと思える内容）の必要性を指摘している。今回それに加えて、それらを支える学びの土台として、また学校の再分配機能として「今・ここに存在することの意味」を付け加えたい。そして、この「今・ここに存在することの意味」を子どもたちに伝えていくには、現在のような大人数が前提の「競争による集団」では不可能である。必要とされるのは、少人数を前提とした包摂を基準とする集団である。そこでは、在籍する子どもの実態に合わせてクラスが形を変えていく。こうしたインクルーシブな集団作りへ向かう可能性を検討していく必要があるのではないだろうか。



#### ●座談会●

・家庭間格差を原因とする教育の不平等について、「実感的に捉えられない」という声に参加された先生方から多く聞かれました。これはある意味衝撃的なことですが、「格差是認」ではないのですが、どうして実感できないのかということ掘り下げて考えて見る必要があるという結論になりました。座談会の中では、「同化圧力が強い教室で、他者との違いが見えないように振る舞っていると同時に、家庭の内実も、学校からは見えにくくなっているから」や、「格差が学力の差となって現れていても、個人差であるといった見方で理解してしまうのではないか」といった意見が出されました。

・インクルーシブの考え方には共感するが、現在の教室で実現するとなるとハードルは高い。個々の特別なニーズに対しては、個別の指導を親が求めてくる。しかし、友だち同士の支え合いなどを見ると、包摂的な集団もイメージできるなどの意見が出されました。

## 第2回 11月15日 「教育においてICTを飼いならすために」 京都大学 石井英真教授

連続講座の第2回目は、コロナの一斉休校により前倒しが政府より発表されたGIGAスクール構想にからみ、ICTの学校導入をテーマとしました。社会ではリモートワークやリモート講義、果てはリモート飲み会まで登場した今だからこそ、この時期に、どのような講師から、どのような話を聞くのかは、今後の私たちに大きな影響を与えます。その意味で、講演の内容を紹介する前に感想のようなものを述べさせてもらおうと、**お話を聞いて実にスッキリとしたというのが本音です。その理由としては、石井先生のお話の前提には、必ず学び手である子どもたちがいて、ICT機器の活用も、授業論や学びの質という全体像の中に位置づけられていたからです。**

### ●講演の内容●内容が多かったので箇条書きでお許しください

コロナ禍において、ICTの活用が叫ばれ、端末が学校現場にも導入される状況に関して、石井先生はまず基本的な方向性を確認した。

◇元に戻ろうとするのではなく、課題に向き合い変えていく

- ・コロナ禍での学校の問題は、以前からあった学校や授業をめぐる問題が顕在化した部分が多い。

◇遠隔と対面のハイブリッドを確立し、災害に強い学校、これまで救えなかった子を救える学校へ

- ・遠隔の自習勉強と生活経験を「学び」化し、学びの勘と思考の体力を鈍らせず、つながりを温める工夫。

◇オンライン化に向けた条件整備をやりきる

- ・閉鎖的で内向きなシステム構築のベクトルを、通用性を高め、子どもの持ち帰りや教師の在宅勤務等も可能な方向に転換していくことが必要。教師たちも、授業に限らず色々な場面でいじってみる機会を増やすことが必要。また、生徒会活動や行事などの自治活動においてこそ、子どもたちに委ねてみれば、機器やツールを自由に使いこなし、新しい取り組みを進めてくれるだろう。一人一台PCは、one of themとして文具化しなませる。

- ・格差拡大につながらないような子どものICT環境の整備ラインを考える

⇒ **オンライン学習で問われているのは、テクノロジーの質以上に、授業観である！**

以上を確認した上で、具体的に子どもたちの学びを保障するとはどういうことかと言う話に移りました。

◇学ぶ権利を保障するとはどういうことか？

- ・自習的にドリルを解いて進め、最終的に、テストで結果を確かめられれば、それで学びを保障したことみなしてよいのか。
- ・修得主義が、結局はペーパーテストの問題が解ければよいと、問題を解いて進めることに陥るのには注意を要する。どの子も落ちこぼさないという大人たちの覚悟なしに、進められる子はどんどん進めたらよいという点のみが素朴に強調されると、学力格差や学びの分断につながりかねない。

そして石井先生のお話は授業論へと入っていく。

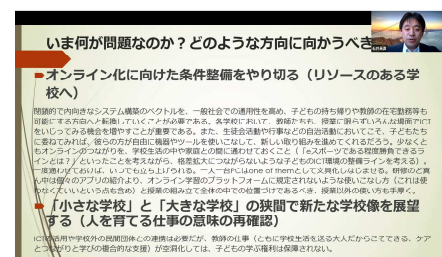
◇「こころの温度」を上げる授業を：リアルとオンライン、それぞれのよさを活かすために

- ・もともと日本の教師たちは、徳育と知育を機械的に切り分けず、学級をつくりつつ、授業をつくってきた。今こそ、つながりづくりの延長線上に、内容を伴いながら、学びと学力を保障し、そこからさらなるつながりを生み出していくことが求められている。
- ・授業のオンライン化については、そのままのクオリティで再現しようとするのは有効ではない。家庭での子どもたちの自習環境をどうサポートするかという発想で考えること、いわば、「授業」から「受業」（自ら内容を修める学び方）への出発点となること。
- ・オンライン学習を有事への一時的な対応手段に留めるのではなく、いつでもどこでも、だれとでも学ぶことが保障される、学校という制度のあり方に関わるものとして「オンライン学習」を捉えていく。
- ・ICTの学びは、ほどほどのハイテク感がちょうどよい。ホンモノの世界や研究や活動のように、より複合的で、割り切れなさやノイズを含んだ学習や活動にアクセスする機会を拡大することが重要。

そして、次の言葉を講演の結論として受け取りました。

◇「脱学校」的な発想で、いまの学校をゼロベースで考え、私教育にまで戻って、そこから学び舎を構築し直していく行くことも考えうるかもしれないが、そこに待っているのは、おき出しの消費社会的なコンテンツと、親のつながりやリソースに規定された社会の分断と、子どもたちの、学びのコミュニティからの疎外ではないか。

◇公教育全体が、オンライン化に取り組むことが生み出す、人的、物的な巨大なリソースが加わることで、スマートに実装した、教育機能と保護機能において「大きな学校」が立ち現れる可能性を期待している。



## 第3回 連続講座教育講演会 12月26日(土) 14:00~ オンライン

### 本田由紀氏(東京大学)「なぜ 少人数学級が必要か」

現在「少人数学級」に関して、文部科学省もその実現を掲げ始めましたが、それが単なる「効率化」や「個別化」のためではなりません。「少人数学級」にどのような可能性を見出すか、そこに「水平的多様化」につながる可能性を見出していきたいと考えます。



↑ 申し込み